

## 『車輪の下』

茗溪塾塾長 宇野 雅春

『車輪の下』というのは、ヘルマン・ヘッセの小説の一つです。自分の人生にきわめて大きな影響を受けた書物を一冊あげなさいと言われてれば、私はこの『車輪の下』をあげることになると思います。シュバルツバルトという南ドイツの小さな古い町に生まれたハンス・ギーベンラートの物語は、私にとって「勉強すること」をやめておこうという点で、自分に都合のいい「物語」だったからです。そして実際この「小説」を読んでからは、ことあるごとに勉強をさぼる口実としてこの物語が私の頭をよぎりました。普通の家生まれたこの天才少年が町中の期待を担いながら、エリートコースを進み、そしてついに挫折し、非業の死を遂げるという、話だけを読むと、そんなに大きく影響を受けることもなかったのですが、当時私には二歳年上の兄がいて、その兄が青森という田舎でまさにハンス・ギーベンラートのような「天才少年」の名を冠していたのです。

小学校の頃に書いた作文が学校中の話題になったり、中学生の頃には英語の弁論大会で県の代表に選ばれ全国大会に出場、中学では一回たりとも「一番」という席次を落としたことがなく、高校へも「一番」で合格したり、私と違って顔かたちも端正で、すぎがなくこの主人公と酷似していたのです。

そんなわけで、この小説はきわめてリアルに私の胸に迫りました。

と同時に、兄に対する尊敬の反面、ねたみのようなものが、たぶん私にはあったように思います。兄のように成績が取れないそねみから、エリートの挫折という物語はとても新鮮に感じられました。その後、東京大学に進学した兄が、同時に病気を患い、入学と同時に休学するという不幸があり、この小説のリアリティーは、ますます強く感じられたのです。

本当に「勉強しない」怠け者の生活スタイルができあがり、点数が悪いたびに、「ハンス・ギーベンラートのようになるのなら、勉強しないほうがましだ」という言い訳を自分自身にしていたように思います。

ただ、後で後悔したことは、私が勉強しないということと、ハンス・ギーベンラートの挫折は何の関係もなく、逆に勉強のチャンスの多くを逸してしまったかもしれない、ということです。「学問」に興味を持ち始める頃になってはじめて「もうちょっと勉強しとけばよかった」と後悔したのはいうまでもありません。「勉強」というのは若いときしかできず、若いときだからしなければいけないことだったと思うのです。

まわりの期待に結構押され気味のような兄が、成人して自分の道を選び、それなりの厳しい人生を歩いたときに、兄の精緻な仕事へのかかわりや、考え抜かれ磨かれた文章の数々を見るにつれ、兄と私との大きな差、つまり「私の甘さ」を思い知ったことはいうまでもありません。

本当は、「勉強をするかしないか」ということではなく、「常に自分を見失わないで生きていく難しさ・厳しさ」をこの物語は教えているように思います。（「合格への道しるべ」より）